

船津胎内樹型

火山噴火により溶岩が森の中を通り抜けたとき、一部の樹木は溶岩が冷えた後で石の中に空洞としてその形を残しました。これらは「溶岩樹型」として知られています。船津胎内樹型は、一緒に倒れた複数の樹木の形がそのまま維持され、円形で長いトンネルを作り出したものです。溶岩の冷却時についた波状の壁と、頭上の鍾乳石から垂れ落ちる「ミルク」のような雫から、富士講巡礼者はこのトンネルを富士山の体内を通過することだと考えていました。その中を這いぐることで、生まれ変われると考えられており、そのトンネルに文字通り「胎内」という名前をつけたのでした。

従来、参拝者は身を清め、膝までの長さの特別なわらじを履き、トンネルを這いぐっていました。トンネルの中には参拝用に昔から山と関わりのある大日如来や、慈悲の菩薩である観音などの小さな仏像が内部に設えられました。巡礼者は、このトンネルから出た後は、昔より赤ちゃんに飲ませていた海藻のスープを飲みました。このトンネルからの土産物は江戸（現在の東京）やその周辺の関東地方では珍重されました。妊婦は胎内の「ミルク」に浸したたすきを身に着け、トンネルの中で使ったろうそくの未使用部分を安産のおまじないとして火を付けました。

今日でも来訪者は船津胎内をかつての巡礼者と同様に這いぐることができますが、照明が電気になり、安全対策としてヘルメットが手渡されます。溶岩樹型の上に建立された無戸室浅間神社には、信心深さと、登頂しきったことを宣言すべく、富士講巡礼者が建てた石碑がいくつもあります。

吉田胎内樹型

南東に 1km 弱のところには吉田胎内と呼ばれるもうひとつの胎内樹型群があります。1892 年に発見された吉田胎内樹型は、存続していた富士講の支部によって、すぐに神聖な場所として認められました。その入口は見えていますが、中を這いぐることができるのは、例年の吉田胎内祭の 4 月 29 日のみです。